

天理文藝

昭和二十七年四月十八日発行 第八号



現代人の救いについて (対談)
 亀井勝一郎・山本正義
 宗教と文学・河上徹太郎
 宗教文学研究・新城・既・大杉

00

道友社

日本ではじめての企て!

よふきぐらし展

一眼で天理教の姿がわかる

催し物 講演・演劇・映画

会場・期間

大 阪・松坂屋 (金曜休み)

4月7日—4月29日 (午前10時—午後5時半)

名古屋・松坂屋 (月曜休み)

5月8日—5月18日 (〃 9時半— 〃 5時)

東京銀座・松坂屋 (木曜休み)

5月25日—6月7日 (〃 10時— 〃 5時半)

札幌・三 越 (月曜休み)

6月24日—7月2日 (〃 9時半— 〃 5時)

博 多・玉 屋 (月曜休み)

8月16日—8月23日 (〃 9時半— 〃 5時)

主 催
 天理教布教部
 協 賛
 各教務支廳

よふきぐらし
 への道
 教祖傳 (ジオラマ)
 現 勢
 おぢば模型
 (パネルマ)



【巻頭言】 文化のうめき……………鈴木信平
 宗教と文学……………河上徹太郎 (六)

現代人の救いについて 【座談会】

現代人の悩みと文明批評能力・生れんとする生命は
 ある・因縁論について・天理文学の道・宗教と政治
 について・平和の條件・宗教家は最後に救われねば
 ならぬ

亀井勝一郎 (三)
 山本正義
 庄野誠一 (司会)

フランス文学の宗教性……………安井源治 (四)

(我が思い出) 今までのところ……………尾崎一雄 (一〇)

宗教文学研究①

戀愛・生殖・信仰……………新城英太郎 (六)
 罪と罰(ドストエフスキー)……………厩専之助 (三)



近代文学の行方……………大杉三郎 (七)

◇随筆◇ 鮮業……………杉山宗吉 (六)
 オルフオイスの聖花……………たかはししげおみ (四)

言 啞と女優……………金子かつら (四)
 ピカソの藝術・抵抗の軌跡……………鈴木治 (四)

想 三島由紀夫の作品と天理教……………名瀬元治 (四)
 随 社会時評……………中田喜八郎 (四)

眉 天理教の文化性……………北川洋 (四七)
 望をひらく……………沖英太郎 (五)

慾の虜(シナリオ)……………佐伯恭教 (六)
 烟 河 口……………伊勢九三夫 (七)

鼻 流に乗って……………東山知彦 (八)
 清 菊地昭衛 (八七)

詩 俳句欄 (田中克己評)…………… (四)
 映画メモ (山村謙一)…………… (七)
 短歌欄 (上村孫作選)…………… (三)
 短篇小説懸賞募集…………… (四)
 クラブ雑誌、後記……………

詩 田中克巳選

金の旗

人間思案と云うことー

萩 寿夫

くらやみ

しめつばいくら闇の
山のすそには、
沼地のくいが限りなく
続いている。

うめたてたその土の表は、
亡びゆくものの総てであろうか。
ごつんと胸にこたえる、
一ふみ一ふみの
底のないゆらぎ。

この上で人は、
わずかな小石の堅い礎を求めて
むやみと足を動かすのだ。
人はもと

この泥沼で生れた。
細いぶよぶよした頭と腕で
いつしかこの沼は、
うめられて了つたが、
うめた土が固らずに

いつまでも動いているのだ。
ぶよぶよと。

インカ帝国の後胤の歌姫の息には
血のこさの思いがある。
太いだみ声と真空でさえふるえるよう
な

かん高いふくみ声の

悲しい宿命はどこから生れたのか。

ただかすかに息づくのは

ふとみ上げた嶺の

鉛色の生の唄ごえなのだ。

とまれ

かずかずの

日は照れども、歌姫の

越えねばならぬハレムの山には

あめ牛の群が

そこしれぬもたえの中で

はむ草をさがしてうごめく。

血のなせるわざとは

どうして云えよう。

彼女はずでに王冠を失っていたのだ。

暗い夕ぐれ。

底しれぬ真空の沼と唄ごえ。

かゝる

さだめの中で

人は

たゞ

かてをにないて動く。

己れがなせるわざの

そのために。

めりこむ足。

深い泥。

再びくらやみについて

この俺の

智慧と血とで

育てたいくばくかの胎児は

俺さまのもののばかりと信じていたが、

胎児は

胎児の掟を

その母の身の中で

いつの間にやら作っていた。

それは胎児にとつて、

悩ましい明け方であつた。

俺は胎児を引きずり出して

打ちすえてやろうと思つたが、

それはしよせん

俺の智慧と力のしくじりであつた。

この胎児は

グラマンクの海の上で

せきりようとどこくにもまれ

地球のまわることをたしかめた

科学機械の鬼だつた。

海ぞいの造船工場のリベットが、

ものすごいひびきを立てて

海をわたる胎児の寢息、

あるいは、

山のつめたい空気の中で

いく百となく作られる時計のセコンド

の

かすかな反響は、

この俺の脳髓までも解剖する。

胎児の潜越は――

この俺が身ぶるいさせられる。

胎児は胎児の判断で、

みずから世にはい出そうとするのだが

それを俺は許したことがない。

俺自身でさえ

定められた事以外は

何も出来ない看守のようなものだ。

俺は胎児に

船を作ることや

胎児の掟を定めることについては

目をつぶらう。

だが

俺の脳髓を切り裂こうと云う

思いつたこと丈は、

俺の生んだ子であつても

許すことは出来ない。

それが、

俺を亡すためにやることなら

尙更だ。

金の旗

ああ、何としたことだ。

この苦がさ。このうずき。

くわつと開いた傷口から、

バラは

匂いの源をとり出した。

ぶよぶよした花びらの上に、

どうにか精一杯で立つている

金の旗は

やつと手術に成功したのだ。

だが所詮匂いの源は、

匂いだけを取り出したのではない。

有機物の残骸は

了度海綿のように痛々しい穴を

無数にあけているに違いない。

匂いだけを取り出すことが

どうして出来ないのだろう。

バラは

傷のいたみにこらえ切れず、

なよなよとしぼんで了つた。

生命だけを取り出すようなものだ。

とバラは悟つていなかった。

自分でした自分の大手術に

バラは少し悲しんだ。

失敗だつたんだ。

だがバラは同じ木の違った枝さきで

再び金の旗をひらめかせた。

――

すべて世の定め唄ごえは

高い峯の中に

音もなくこもっている。

巨大な工場や

あめ牛の群たちは

やがて峯を奥まで掘り下げ

山の形を踏みかためて変えはするが、

すべて崩しきつた土のかけに

一体何を開けるだろう。

あるいは工場の支配人達、

あるいは牧童たちが、

何をそこから聞くだろう。

山の形を知りつくしたと

思うものも

聞えぬ宿命には

未だに心を打ちふるわせ、
計り知れぬとつぶやいて、
みつともなく逆らうのだ。
バラの精も――
俺の智慧も――

暖かい息吹きを交そう

生 子

平和を叫ぶ事がいけないのではない。
ストをする友人たちよ、
書く事が、集る事がいけないのではな
い。

吉田さんもラスクさんも鬼ではない。

戦争反対を云う事は、

決して悪い事ではない。

おゝ同志よ、

我々の前にひろがる

このドロウミがいけないのだ。
人々の作るこの大海原が――。

それを変えるのは

私たち民衆であり、労働者であり、愛
をもつ庶民たちである。

徒らにさわぐまい。あせるまい。わめ

くまい。

あの星を見つめてじつと考えよう。

暴力の相手は暴力であり

闘争の相手は闘争でしかない。

私たちは

暴力も闘争も求めてはいない。

私たちの求めているのは、

あの星のような気高い空気を吸う幸せ
なのだ。

もう少し、じつと考えて見よう。

相手は人間なのだ。

寒い国にも赤い都にも心をもつ人間が
いる。

こゝろ。

それが私たちを守る事を信じよう。

歴史は今日作られる。

きのうの歴史に何でこだわる必要があ
ろう。

戦争！ 終結！ 平和！ 混乱！ 戦争！

それらは定木ではない。

歴史は今日私たちが作る。

心を開いて暖い息吹きを交そう。

それらを作る事が必ず出来るのだ。

何故なら、

生きとし生くる者は、みな

あの星を見つめているものを

選評

田中克巳

萩寿夫氏の「金の旗」三篇、生子
氏の「暖かい息吹きを交そう」とも
に力作である。現代の息のかゝつた
作品だと思ふが、読みかえしている
中に、なにか物足らなさが感じられ
出すのはどうしてだろう。萩氏の第
一篇「くらやみ」が殊にそうで、何
か考えさせながら、結局、作者を掴
みそこねて、いら／＼させられる読
者が多いと思う。これだけ豊富にこ
とばを使いながら、あとになるほど
思想が混乱して来るように思う。も
一息、適確に表現するすべを心得た
らいゝ詩人といわれると思う。生子
氏はたゞ／＼しくて却つて好感をも
つが、これで甘えてしまつてはなら
ないといふことは、老婆心でなくつ
ても云つておかねばなるまい。今後
の精進を期待する。

俳句

松隈青壺選

万緑のこもれる山や水温む	佐野潮風
いかるがの麦野の果の御堂かな	
満月にすだま返すや滝赤目	大野やさつね
朝陰の水にきゆつきゆつと茄子の紺	
スギトピー風に吹かれてそちら向く	
雪嶺の裾のなる灯のみ希ふ	
露けしや墜ちたる星がみつからず	中西みちる
桐一葉音を残して秋のくれ	
むらさきの朝つゆ宿る野菊かな	
青桐やうす日こぼれてもの想う	河村陸郎
紅緒下駄濡れて並びし秋まつり	
夕立や桐の大葉を打ち鳴らし	
ガラス越し稲穂揺れ合う夕かな	植村里仙
梅雨晴れや葛城山系雲一朵	
一木の蔭に薊の咲く夏野	
山の子等このつゝらおり学校へ	阿野猶人
いしふみに苔むし秋の鹿なきぬ	
夕月や吉野の山に古事語る	
高く低くてぶりの歌に紅葉散る	
この月夜笛の音遠く又近く	川瀬春雄
病みつゝも父と母とのおる月見	

観月のコンサート聞く古都にして	淵田迪郎
思ひ出の支那饅頭や月の客	
月見ぞと吾子等草々持ち来たり	大竹嘉峯
山路やとんぼ大群大空に	
川底の砂の光れる良夜かな	唐沢辰雄
今日堀りし芋も供えて月見かな	
草ひばり昨日の日記を併せ書く	矢岡利一
柿もぐやいづちの村か笛太鼓	
朝の庭まんじゆしやげただ一つ	杉村恵美子
いち／＼くの実成り終り秋の風	
ふるさと月見えずとか母の文	白石忠雄
いたづらに瀬の音ひ／＼く無月かな	小山恒英
夕立に芋の葉かぶる農夫かな	佐藤幹雄
連なれる山ふところや稲の花	上村幸女
村時雨宿かる乙女声しづか	緒方勉
バス道のげんげクロバエ土埃	植村池畔楼
夕月や想ひ想ひの人と人	大竜蛙面居
秋空やわが子と見たり雲一つ	本池聰明
虫の声静まり果てし夜長かな	三木正和
日々に稲穂色づく墓地詣り	三木弘道
雨あがりひときわかし蟬の声	福寄信郁
名月や書院障子にかげうつる	小西利彦
出揃ひの稲穂の中にむせながら	岡井光修
秋風や若きおのれはおかしがる	岡本昭悟
十六夜のすぎゆく雲のはやかれと	河本昭悟

私はたゞ嬉しさにむせぶだけでした。
「家の修繕もあと半月でできまいますから必ず迎えに参ります。待つて下さい」

と私の熱っぽい掌を握つて下さった時、あなたに手をとられてどこへでも喜んで連つて行つていたゞくために、石にかじりついても生き延びなければと思うと堪らなくなつて神様に手をしつかと合せ

「どうか半月でいゝから生かして下さい」と一心にお願いしたのでございます。

の日から私はあなたが一日でも一時間でも側にいて下さらないのが堪らなくさびしくなつて、どうにもならなくなつて了つたのでございます。心では分り切つていながら、どうしてもこれだけは押え切れず、眠つてゐるのか醒めてゐるのか、全く夢中で譫言にまであなたの名を呼び続けたと兄にいわれてびっくりしてゐるのに、またもあなたの姿が現れるのです。

こうして一週間過ぎました今日、もう一日も待てなくなりました。どうか変な女とお笑い下さい。どんなことがあつても生きなければと、たゞそれだけでどうやらこの一週間を過していましたが、もう私の体は駄目なのでございます。医師は今日中とはつきり申しました。医師にいわれなくとも自分ではつきり分ります。一度び打ちのめされた私の傷手を療すだけはあなたのお蔭で出来ました、こゝまで落ち切つた私の

運命を切り開く勇氣は私の体から抜け切つて、残つたものは骨と皮と僅かの血だけです。今更何ができましよう。私はあと数時間息を引取ります。でも私は口惜しいと

も何とも思ひません。夫の叔父は自分の実家を思い、夫を愛すればこそ心にもないことを私にいわたのだと思ひます。みんないゝ人達ばかりなのに私だけがよくない人間だつたのでございます。見たことのない母も二十七の私と同じ年で同じ病気で亡くなつたと聞きました。二人の幼児を残した母はどんなにかさびしくうらめしかつたでしょう。その母の子として生れた私ですもの、何もかもみな私の因縁なのでござい

ます。でも私には子供がないのがせめてもの幸い、私が死んで行くのはこのような因縁を背負つて行く為だと思つと「どうか神様に免じて私の家から肺病の因縁を切つて下さいませ」と一心にお祈りしながら死んでゆける私は、きつと幸せに違ひありません。本当に恥かしいことですが、私はあなたを心から恋慕するようになって、いまだに方々の要となられたらとどんなに思つたか知れませんでした。しかしできないことでした。せめて私の楽しい夢として胸の奥底に永久に秘めておきたいのでございます。どうか「あなた」と最初から書かせて頂いた次第をお許し下さいませ。たゞあなたがも

クラブ 雑記

◎廿六年度道友社賞、同新人賞には会員作品が入らなかつた。毎回努力賞に入つて来たので一寸淋しい気がした。新人賞の文藝部門だけは本会員から受賞者を出したものである。

◎その道友社賞の選定委員会の席上「よい映画シナリオがほしい。天理教の手でよい映画が作りたい、といつても肝心のシナリオかシナリオになるような小説の優れたものがないから映画をつくる話はいつてもオジヤンになる」という意見が出た。これは教議会のときや教務廳の企画にいつも出る意見である。本クラブ会員はこれを考えてよい作品を出してほしいという。

◎……「天理文藝もそろ／＼軌道にのつたね」という声とともに、うつかりすると折角軌道にのりかけて、クラブの足許から崩れかけるようなことはないか？と時々考えて見る。それは肝心の会員の熱がさめてしまつては万事休すであるから、そうしたことも考えて今年度は本クラブ運営の上でも多少予算を増して貰つて座談会や講座なども開く計画で、また掲載作品にはそれ相当の原稿料を出すことになつた。懸賞募集も度々やりたいと思つてゐるが、そうした機会を提供するほかに、むしろ着実な会員の勉強には費段の作品に、実質的に稿料を出せるよう

にしたいと思う——以上、樂屋裏の話になつたが、会員の努力をお願いしたい。

◎……今号の編集企画には作家の庄野誠一氏が非常に助言と努力を傾けて下さつた。氏は「文学界」の来る五、六月号にまた作品を発表するはずで作家として立つてゐるが、氏の本領は編集の手腕にあり、特に「新人を掘出して育てること」に非常な熱意をもつ人、この人が天理文藝クラブに少なからぬ好意以上の愛情を示されている。——こんなことを表立つて書くとは氏に迷惑がられ、どこまでも蔭で教内から新人作家を待望してゐるが、ある面では氏の今後の指導を期待して止まない。

後 記

▼今号からどうやら文藝雑誌としての体裁と内容を整えることになつた。編集企画も今までは試験期の闇中摸索で、第八号を迎えてやつと本筋へ出た感があり、むしろこれからこそ文藝誌として特色ある独自のものををつくり出したいと思つてゐるが、今号はその手はじめといふところである。その意味で今号の編集についても、初めの企画と違つたものになつたものや、足らなかつた点など、後になつて感じられるが、皆さんからは非これについて感想や御意見を寄せていただきたい。また具体的な編集企画の希望

う一ヶ月早く私を導いて下さつたらと思ひますが、すべて私の因縁なので、今生では到底果せないのでございます。神様に一心におすがりして今度生れ替る時はあなたのようなお方の側に生れたいとたゞそのみを念じております。本当ならば人を恨み苦しみ悶えてあえない最期を遂ぐべき運命の私が、あなたのお陰で喜んで出直しさせて頂けるなど本当に夢のようでございます。私は完全に救われたのでございます。因縁に負けた母の傍に行つて、あなたから聞かして頂いた神様の話を取次がして頂いて母と手をとつてまだ見ぬ「おちば」に帰らして頂けると思つと楽しみでございます。最後に夫の妹は私とは月とすつぽんの違いで真に氣立てのよい娘でございます。どうか宜しく導いてやつて下さいませ。また世の中の人全部が私のようなひねくれた人間にならぬよう、早くから神様の話を聞いて丈夫で幸福に暮して下さるようひたすら祈りながら、あなたにわざ／＼阿武隈の急流を上つて頂くよりは、私の方から清流に乗つて安々とあなたを恋慕つてお側に参ります。呼吸が苦しくなつて来ました。寒い風が音を立て、吹いています。もうすぐ寒い冬が訪れます。御自愛と生涯を通じての御幸福を心からお祈り申し上げます。さようなら。
(懸賞入選作品)

も註文していただきたい。

▼会員の投稿作品は、沖、佐伯両氏のほかは前号懸賞入選作だけ掲載し、このほか二、三といふと思われるものもあつたが紙数の都合で次号に割愛した。また同じ懸賞入選、佳作の萩、潮井両氏作品も割愛した。

▼前号で募集の「千字小説」はめばしいものが一篇もなく掲載出来なかつた。次号にはよい作を期待したい。(門馬)

天理文藝 第八(春季)号

定 價 五〇円 (送料六圓)

昭和二十七年四月十八日發行

編 纂 人	磯 田 義 三 郎
發 行 人	岡 島 善 次
發 行 所	天理教道友社 奈良縣丹波市町三島
發 賣 所	天理時報社 奈良縣丹波市町三島 振替 東京一三八二二 大阪二八四二二

天理文藝 編集所

奈良縣丹波市町三島
天理教道友社内